

はじめに

国立公園の歴史をさかのぼると、一〇〇年前の大正一〇年（一九二一年）に、内務省衛生局が国立公園創設に向けて、全国の景勝地から一六カ所の国立公園候補地を選んで調査を開始したことに目が止まる。この調査が、国立公園具体化の大きな第一歩である。

調査は「上高地を中心とする国立公園」から始まり、調査を行っ

たのは後に国立公園の父と呼ばれる田村剛と、国立公園創設の基礎資料になった「国立公園候補地概観」を書いた中越延豊の二人である。二人は内務省衛生局保健課の職員で、身分は嘱託だった。国立公園創設の歴史で、中越延豊の大活躍が良く知られていないので、中越の大活躍と功績を述べようと思う。

田村剛と中越延豊の国立公園候補地調査

田村剛は、大正四年に東京帝国大学農科大学林学科を卒業し、母校や千葉高等園芸学校（現千葉大学園芸学部）の講師をしていたが、大正九年八月に公園行政を所管する内務省衛生局へ入り、国立公園候補地選定の業務に当たった。

中越延豊は、金沢の出身で、第四高等学校から東京帝国大学農科大学林学科へ進学し、大正六年に

卒業した。したがって、中越は田村の二年後輩である。中越は、卒業と同時に明治神宮造営局へ入って神宮造営に携わり、内苑工事が終了した大正一〇年に内務省に採用され、田村の指導の下で国立公園候補地の調査に当たることになった。

田村と中越による上高地の調査は、大正一〇年六月八日から始まった。調査期間は二四日間で、中越は入省してからわずか二カ月で上高地へ赴いているが、林学科卒業なので山岳地域の調査は、苦にならなかったのかと思う。調査は上高地を中心に、北は燕岳、葛温泉、南は白骨温泉、西は笠ヶ岳、平湯温泉に至る一帯にわたった。

上高地は、現在中部山岳国立公園だが、当時は「上高地を中心とする国立公園」という独立した国立公園候補地だった。飛騨山脈には、上高地の他に候補地として「白馬山を中心とする国立公園」と「立山を中心とする国立公園」があり、後に三候補地は統合され、昭和九年一月四日に「中部山岳国立公園」で指定された。

候補地調査は、大正一〇・一一年度の二年で一六候補地のうち八

候補地が終わった。まだ八候補地の調査が残っていたが、田村が大正一二年三月に内務省の嘱託を受けて、欧米諸国へ国立公園の現状調査に出かけたため、大正一二年からは中越が一人で調査を続けた。田村が欧米へ出かけることができたのは、内務省衛生局も、田村も中越の調査に信頼を寄せていたからだろう。

大正一二年九月一日に関東大震災が発生し、国は帝都復興に力を注ぐ必要から国立公園創設熱が低下し、さらに経済不況の影響で候補地調査費の確保が難しくなり、大正一五年度から調査は中断された。こうした状況下の大正一三年八月に、田村は帰国したが内務省への復職が認められず、復職できたのは昭和二年七月である。

ところが、田村は昭和三年三月に阿里山、新高山などの台湾視察の帰途、大怪我をして長期入院を余儀なくされ、候補地調査には復帰できなかった。調査が中断して残っていた「登別温泉」と「大沼」の二候補地は、昭和三年度に中越が一人で行った。したがって、内務省で一六候補地すべてを調査したのは中越一人だけである。



中越延豊

田村剛：「中越延豊君の追憶」、国立公園三（一〇）から

中越延豊の 「国立公園候補地概観」

中越延豊は候補地調査終了後、内務省衛生局内に置かれている、国立公園協会の機関誌「国立公園」に、「国立公園候補地概観」の表題で、表1に示した候補地紹介を連載した。各候補地の記事は二〜五頁で、内容は写真、地形、風景の雄大性、森林の状況、高山植物、気象の特徴、土地所有、温泉、施設、利用状況、到達性、整備の方向性など多岐にわたる。この他に国立公園としての素質の評価や、候補地間の比較も記述している。

内務省衛生局は、一六候補地の調査が終了したので、調査結果をまとめた「国立公園候補地調査概要」を昭和五年三月に公表したが、内容は中越の「国立公園候補地概観」を基にしており、記載に類似の文章が多くみられる。昭和六年国立公園法が制定され、「国立公園候補地調査概要」は国立公園委員会が指定候補地を選定する基となり、中越の「国立公園候補地概観」は、国立公園創設へ向けて貴重な基礎資料になっている。

表1 中越延豊の「国立公園候補地概観」

掲載年	掲載順	候補地名	掲載誌 巻・号・頁	頁数
昭和4年	1回	温泉岳	国立公園 1(3)、14-17	4
	2回	阿寒湖	〃 1(4)、11-13	3
	3回	日光	〃 1(5)、14-17	4
	4回	小豆島及屋島	〃 1(7)、12-14	3
	5回	登別温泉	〃 1(8)、13-15	3
	6回	大沼	〃 1(9)、14-15	2
	7回	伯耆大山	〃 1(10)、16-18	3
昭和5年	8回	立山	〃 2(1)、7-11	5
	9回	霧島山	〃 2(2)、15-16	2
	10回	大臺ヶ原山	〃 2(3)、14-16	3
	11回	白馬山	〃 2(4)、17-19	3
	12回	磐梯山	〃 2(5)、10-13	4
	13回	十和田湖	〃 2(6)、9-12	4
	14回	上高地	〃 2(8)、8-10	3
	15回	富士山	〃 2(10)、6-10	5
	16回	阿蘇山	〃 2(11)、5-8	4

中越延豊の 活躍に対する評価

中越延豊は、長年腹膜炎に苦しんでいたようで、昭和六年九月に若くして急逝され、国立公園の業務に携わったのは一〇年余りで短かった。そのために、中越が国立公園創設に活躍した状況が、良く知られていないのではないかと思う。

中越が逝去したとき、田村剛は「国立公園」誌へ「中越延豊君の追憶」を載せ、その中で、中越の

功績の一つとして国立公園候補地調査にふれ、

橋本龍伍厚生大臣、林譲治衆議院議長らの出席の下、吉田茂総理大臣の祝辞があり、式典の中で感謝状贈呈式が行われた。

に親しみ、且つその地方に知人を有する者はないであろう」と述べ、中越の『生前の犠牲的な活動により今日の国立公園制度の基礎も築かれたのである。日本の国立公園が、その盛観を世界に誇る時代が出現するならば、その最も割の悪い、一向に引立たぬ下積仕事を中越君が引受けてゐて呉れたことを忘れてはならぬ」と評価している。

中越の八年にわたったすべての国立公園候補地調査、「国立公園候補地調査概要」の基になった「国立公園候補地概観」による全候補地の紹介と国立公園の啓発、国立公園法策定への関わりなど、国立公園創設に多くの活躍が認められた感謝状であった。

現在、国立公園は三四カ所、国土の自然環境保全、国民の保健・休養・教化、生物多様性の確保に寄与し、さらに国際観光への貢献も大きい。こうした今日の国立公園の盛観を思うとき、国立公園創設への中越延豊の活躍と功績を評価したい。

現在、国立公園は三四カ所、国土の自然環境保全、国民の保健・休養・教化、生物多様性の確保に寄与し、さらに国際観光への貢献も大きい。こうした今日の国立公園の盛観を思うとき、国立公園創設への中越延豊の活躍と功績を評価したい。

参考・引用文献

- ・田村剛(一九三二)「中越延豊君の追憶」、国立公園三(一〇)、三四
- ・油井正昭(二〇二〇)「大正から昭和にかけて内務省が行った国立公園候補地の調査と結果に関する論考」、江戸川大学国立公園研究所年次報告第五号、三二—二二

油井 正昭 ● ゆい まさあき

千葉大学名誉教授、江戸川大学国立公園研究所客員教授、前(財)国立公園協会理事長。